

令和7年度

幼稚園だより 10月号



文京区立千駄木幼稚園

子どもの姿をしっかりと捉えて

副園長 矢澤 弘美

ようやく、朝晩に秋の気配が感じられるようになってきました。“〇〇の秋”とよく言いますが、私たち教員は“学びの秋”を味わっています。

文京区立幼稚園の教員は、全員、文京区立幼稚園教育研究会（略して区幼研）に属しています。『夢中になって遊ぶ幼児の育成』という今年度の研究主題のもと、“自然”と“絵本・紙芝居”の2つの部会に分かれ、毎月1回、10園の教員同士が直接顔を合わせて、互いの保育実践について協議しています。

先月は、本園が区幼研の会場となり、それぞれの部会で講師の先生をお招きして学びを深めました。講師の先生方のお話には共通する部分がありました。それは、保育をする者として、目の前にいる子どもをよく見ることが何よりも大切である、と話されたことです。“子どもにどう言葉を掛ければよいか”“どう寄り添うことが必要か”、と悩んだ時、その答えは“子どもの姿の中にある”ということです。

先日、教員たちが、運動会のあるリズムについて、「子どもたちの動きをもっと引き出すにはどうしたらよいか」と職員室で頭を悩ませていました。

考えを巡らせた末に、話が進む糸口となったのは、「〇〇ちゃんは、〇〇の動きを気に入っていますよね」という担任の言葉でした。「確かに、あの動きになると、ほかの子どもたちの表情も生き生きとするね」「どう動けばよいか、イメージが湧きやすいからかな」「それなら、動きを思い浮かべやすい声掛けをほかにも増やすといいかしら」と、具体的な子どもの姿をきっかけに、その学年の特長に改めて気付いたり、教師の役割を見出したりすることができました。

まもなく運動会です。日々の遊びや活動の中では、周りの応援を受けながら走る心地よさを感じている子、先生や学級のみならずと一緒だと“何だか楽しい”と感じている子、保育室ではない場所で動くことに少しドキドキしている子など、様々な姿が見られます。どの姿にも、その子の今の思いが込められているので、大切に受け止めていきたいです。子どもたちが何を経験し、どう感じているか、私たち教員は、目の前の子どもたちの姿をよく見て捉え、一人一人の思いに寄り添った声の掛け方や動き方を工夫していきたいと思えます。

文林中学校の
広い体育館で体操しよう
「エイ ヤー サー！」

